

# 現代中国社会における高学歴重視の現象とその背景

11K012 長谷川達也

## はじめに

近年日本社会の大学進学率は高い水準を維持しており、昨今の高校生の2人に1人が大学へと進学している。しかし高い進学率は、社会に大量の大卒者を生み出し、日本社会において高学歴の大衆化を招いている。筆者がこの問題を研究するのは、現代社会における高学歴の価値について疑問を持ったからである。大学生が一握りのエリートであった明治、大正の時代とは違い、平成の今日では猫も杓子も大学へ進学し、果ては博士号所持者の貧困や就職難までが報じられている。

大学進学が大衆化した現在の日本社会では、大学での学びは重要視されていないのではないかと、というのが筆者の実感である。伝え聞くところでは、昨今の大学生の就職活動で大事なものは「コミュニケーション能力」と「大学時代に力を入れたこと（学業以外で）」であり、就職活動で必要とされるものは大学での学びの外にあるようだ。筆者も一大学生として大学に通っている以上、こうした現状には関心をもって注視していたが、それ以上に自身が身を置いている高学歴の価値について疑問を感じていた。

猫も杓子も大学へ行くようになった今の日本では大学で学ぶことの意義や社会での大卒者の重要性などは薄れつつある。高学歴が普遍的な資格となってしまった現在の日本社会では、高学歴についての本来的な価値を計ることは非常に難しくなっていると言える。

ところで日本の隣国、中国では改革開放以降の経済発展に伴い大学への進学熱が高まっている。大学進学者の数はこの20年近くの間には10倍以上に伸び、日本と同様、中国も高学歴の大衆化の道を歩み始めていると言える。しかし多くの人たちが大学へ進学するようになったということは、それだけ現在の中国社会に高学歴の重要性が認識され始めていることの表れでもある。

そこで大学進学熱が高まっている中国社会に目を向け、大学へ進学しようとする人々の動機を研究することで、社会で信じられている高学歴の価値を明らかにしたいと考え、本卒業論文を書き出した次第である。

本卒業論文では、中国社会での高学歴志向の現象に注目し、社会で広く信じられている学歴信仰の原因を解明していきたいと考えている。第1章では学歴信仰の土壌を儒教および科挙に求め、歴史的観点から問題の掘り起しを行っている。第2章では受験生とその家族にスポットを当て、彼らの置かれている環境と学歴に対する意識について、第3章では大学を卒業した後の進路状況と現代中国の社会情勢について述べている。これらの研究によって中国社会において高学歴信仰が起こる背景を明らかにし、高学歴を志向する人々の意識を読み解くことで、中国社会が求めている高学歴の価値を知ることができるのではないかと試みである。

# 第1章 中国社会における学問の歴史的背景

## 1. 儒教の誕生から国教化への流れ

儒教の歴史は中国春秋時代、魯国（現在の中国山東省）において儒教の始祖とされる孔子の誕生から始まる。中原地方の支配者であった周の力が衰え、周辺の侯国が勢力争いを行っている時代、孔子は君子の台頭こそが平和を招くと考え、将来の担い手である若者を対象に私塾を開いたのが儒学の始まりである。孔子は、自身の教育によって若者たちを理想の人間像である君子へと育て上げ、彼らが各地の政府に士官することで社会を変革できると考えていたのである。

周代初期からの伝統的な礼儀作法と五つの徳（仁、義、礼、智、信）を重視し、君主自身の徳しのぎによって国を治めようとする孔子の主張は、鎬を削り合う諸侯たちには受け入れられるものでは無かった。その為、孔子は自分の考えを受け入れてくれる侯国を求め、弟子たちと諸国を流浪することとなる。先に仕官した弟子の取り成しや、君主たちからの招聘は幾度かあったが、孔子の名を利用しようとするものなど誠意に欠けるものばかりであり、孔子はその生涯を通じて理想の教育を実現する機会を得ることができなかった。

儒教が誕生した当時の中国では、様々な思想家が相次いで誕生していた時代であり、それらを総じて「諸子百家」と言う。この時代において儒教は数ある学説の一つでしかなかった。儒教の他に有名な思想として道家や墨家が挙げられる。この時代、数ある思想のなかでも儒家に対抗していたのが墨家である。形式や礼節を重んじる儒家に対して墨家は節用（消費の節約）を唱え、実用性を重視した。また儒家が家族関係を重視するのに対して墨家は博愛を唱えるなど儒家とは相反する思想を展開するものの、多くの弟子を集めたが墨子の死後は、衰退の一途を辿った。儒教と共に現代中国でもなお強い影響を及ぼしているのが道教である。道家の祖とされる老子は、人間は生まれた時から善良な存在であり、その状態を維持するために放置しておくことが望ましいと考えた。こうした道家の思想は神仙思想と結びつき、やがて道教が誕生する。来世について語らない儒教の受け皿として、道教は大衆の指示を集め、今日でも幅広く中国国内において信仰されている。

孔子の死後百年程後、儒教において孔子と並び「孔孟」と呼ばれる孟子が誕生する。弁論の巧みな孟子は諸侯たちの前でその才を振るう一方、『孟子』を執筆する。

紀元前221年、秦が中国を統一すると儒教は受難の時代を迎える。始皇帝の臣下であった法家<sup>1</sup>たちは広大な領土を維持する為、それまでの伝統を無視し厳格な法による統治を行おうとした。法による統治という、この施策は、為政者は自身の徳によって民を導くもの、と考えていた儒家の学者たちから批判を浴びることとなる。

その結果、法家は儒家が自分たちの仇敵であると始皇帝に進言をし、それを受けた始皇帝の命により「焚書坑儒」が起こる。この「焚書坑儒」によって実用書以外の様々な書物が焼かれ、四百名以上の儒教学者が生き埋めにされたといわれている。

やがて秦が滅亡し、漢が誕生することで儒教に大きな転機が訪れる。秦を打倒することで政權を打ち立てた漢は、その政策も反秦的な性格の強いものであった。その為、秦代に行われていた儒教への迫害も止むこととなった。漢の高祖が宮廷内での武人たちの狼藉に頭を悩めていること

を知った儒家の叔孫通<sup>しゅくそんつう</sup>は、宮廷への礼の導入を進言した。その結果、武人たちは騒ぎを起こすことがなくなり、叔孫通は高祖の信頼を得ることに成功する。これ以後、儒教は体制の中でその力を発揮していくこととなる。

漢の武帝の時代、王朝の基礎は固められ対外的にも積極的な政策を打ち出そうとしていた。その為、王朝はそれまで主流であった道家思想ではなく中央集権的政治を是認する新たな思想を必要としていた。そうした流れの中で儒教は国教としての地位を得ることとなる。その発端となったのが当時の儒者、董仲舒<sup>とうちゆうし</sup>である。董仲舒は武帝から政治について問われ、それに堂々たる見解を奉ったことから武帝の信任を得る。董仲舒は専制政治を支持する儒教の考え方をもって武帝の求める政治を実現することとなる。董仲舒の発案によって前136年に儒教の經典である五經<sup>2</sup>を専門に教える五經博士の官が設置され、前134年には考廉<sup>こうれん</sup>の制度が設けられ、在野にいる儒教的教養を持つ人物が推薦によって官吏へと登用されるようになる。これ以後、教養は儒学に拠り所を求め、儒学を修めることが官職を目指す上で必須とされるようになる。

隋の煬帝の時代になると、新たな官吏登用の制度として科挙が始まる。科挙以前は、高官や地方長官の推薦によって人材を登用する「選挙」や官吏希望者を人物評価によって採点する「九品官人法」などがあったが、これらは時代を経るにつれ形骸化していつてしまう。「九品官人法」は400年近く続いた制度ではあったが、およそ300年ぶりに中国を統一した隋は、数多くの有能な官吏を求めており、「九品官人法」を廃止し、それに代わる新たな科挙制度を行うようになる。科挙は、志のある者は身分に関係なく、誰でも受験することのできる画期的な制度であった。また、その問題のほとんどが儒学に依拠したものであったため、官職を志望する者たちは儒学の勉強に勤しむようになり、儒学もその性質が受験勉強用の学問へと変わっていくこととなった。

宋の時代に儒学は変革の時代を迎える。それまでの儒学の勉強法は、経書を一字一句忠実に解釈することが一般的であった。しかし宋王朝は、科挙制度を重視し、科挙受験者の増加によって各地に儒学的教養を持つ知識人が多数誕生することとなる。一方で儒学を身に着けることで前途を切り開いてきた彼らにとって、経書に忠実なだけの学問は納得のいくものではなかった。彼らは儒学に生きた知を求め、その知を実践することを重視するようになる。こうした思想や科挙の効果などにより北宋では范仲淹や王安石（王安石については次節で例として述べる）など、貧しい出自から階級上昇を果たした改革者が生まれることとなった。

宋の滅亡後、元、明の時代を経て中国最後の王朝となった清朝は満洲人による征服王朝でもあった。全人口の1パーセントほどであった満洲人が中国史上最大であった領土の統治を行うためには、各地域・民族にたいしてある程度の思想の自由を認める必要があった。その為、漢人を中心に発展繁栄してきた儒学が弾圧を受けることもなかった。そのうえ、儒学の中に君主としての模範を見出し、それに努める皇帝が出てくるなど、満洲人の間にも儒学は浸透していくこととなる。

## 2. 科挙の始まりと過熱化

前節でも述べたが科挙は隋の時代、それまでの官人登用制度であった「九品官人法」の形骸化

を受けて誕生した新しい登用制度であったが、その制度は歴代王朝によって受け継がれていき、1905年に清朝によって科挙が廃止されるまで1300年近くもの長きに渡り中国を支え続けることとなる。

科挙は身分の分け隔てなく優秀な人材を官僚として登用する制度であった一方で世襲制である貴族の力を削ぎ、皇帝の下へ権力を集中させるものでもあった。隋の時代に生まれた科挙は唐の時代を経て、宋の時代にて制度としての完成を迎え、これ以後の科挙は宋の時代のもをひな型とするようになる。そのため本稿での科挙の説明では宋以後の科挙の仕組みを扱うものとする。

科挙の試験区分は三つに分けられている。三つの試験の中で最初に行われるのが郷試である。この郷試はそれぞれの地方行政である州もしくは府で行われる地方試験であった。郷試は三年に一回の割合で行われ、受験者の出生地で受けることと定められていた。この郷試を合格することで科挙における次のステップである会試を受けるとができるようになる。また明・清の時代には郷試合格者は「挙人」と呼ばれた。

会試は、郷試の行われる翌年に行われた。唐・宋の時代は「省試」と呼ばれていたこの試験は「京城」（当時の首都）で行われた。三つの試験の内、最後に行われる殿試はその性質上落第者が出にくいものであったため、この会試が実質的な本試験であった。

科挙の中で最後に行われたのが殿試である。この試験は時の皇帝自らが試験官となって執り行われており、受験者の合否を決めるものというよりは答案の内容によって受験者の順位づけを行うものであった。殿試を通った者には「進士」という資格が与えられ、高級官僚としての将来が開けることとなる。また、殿試の首席合格者は「状元」と呼ばれた。「状元」は知識人にとって生涯最大の栄誉であり、これを輩出することは一族だけでなく地方にとっても悲願であった。

科挙は時代を経るにつれて受験者数が増大していき、やがて最初の試験である郷試の合格倍率が100倍を超えるということも珍しくなくなっていった。身分の貴賤に関係なく受験をすることができた科挙は、他に階級上昇を果たす方法の少なかった当時の中国社会においてほとんど唯一ともいえる手段であった。そして科挙制度の中から、宋の宰相であり改革者として名を馳せた王安石に代表されるような苦学の身から立身出世をし、国家の中枢を担うようになった人物が幾人も誕生したことで、彼らを成功のモデルケースとして、科挙を受ける一般民衆がかなりの数存在

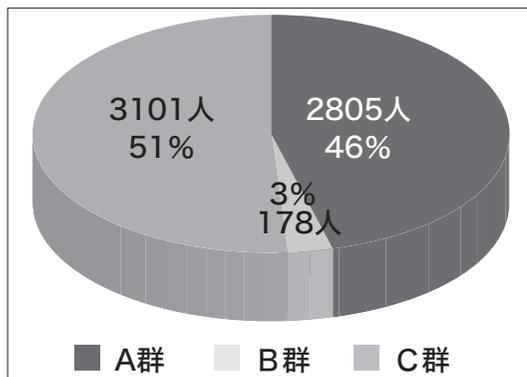


図1-1 明の進士総数

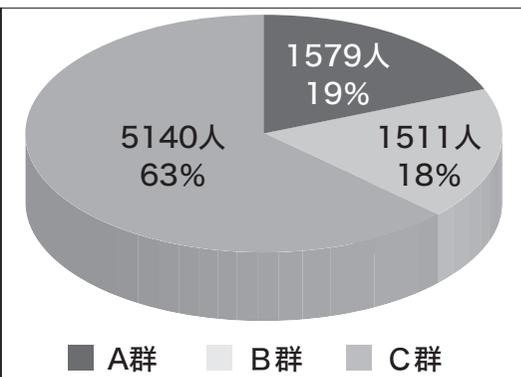


図1-2 清の進士総数

出所 何炳棣『科挙と近世中国社会』p114.115から筆者作成

したのである。

図1-1及び図1-2の数字は何炳棣の『科挙と近世中国社会』から引用をしている。図は、明・清の時代に進士となり進士名簿に記載された者の中から、家族背景が明らかとなっている者をA群・B群・C群に分類したものである。

A・B・Cの分類は名簿の進士から遡って三代以内に、科挙の受験資格である生員の資格保持者を輩出しているかどうかである。A群は遡って三代以内に生員を出していない家から進士が出たグループである。金で官位や肩書を買うことのできた当時の中国にあって、三代の間に生員以上の資格を持った家族がないということは、金銭的余裕の無い貧困層から身を起こした人物であるということが分かる。

B群は先行する三代以内に生員を一人以上出しているグループである。しかしこのグループは、三代以内に科挙合格者などの生員以上の人物を輩出していないことから、それほど高い地位にある家族ではないことが推測できる。したがってこのグループは庶民階級に属するといえる。

C群は先行する三代以内に生員より上の学位や官位の保持者を出しているグループである。このグループには官位を金で買った、金銭的余裕のある家族や、高級官僚を先祖に持つ者など社会的に上層に位置している。

本節で注目したいのは進士総数内でのA・B群の占める割合である。明の時代の進士総数は6084人、内A・B群を合わせた数が2983人であり全体の49%を占めている。清の時代では進士総数が8230人、内A・B群が3090人で約38%である。A・B群出身の進士の割合は、清の時代では明の時代と比べて10%ほど下がっているが、それでも全体の40%ほどを占めていることを考えると庶民階級にとって、進士の身分が階級上昇を果たす上で最も有効な手段であり、科挙に庶民の人气が集中していたことが推察できる。

### 3. 科挙の終焉と学問の近代化

19世紀に起こったアヘン戦争及びアロー戦争での敗北によって清は大きな岐路に立たされる。自国と西洋列強との軍事・科学技術の差を目にした官僚たちの中からは、その差を埋めるために西洋に学ぼうとする革新的な者たちが表れ、それが西洋の技術を取り入れようとする「洋務運動」へと広がっていく。日清戦争後、清朝の政治家康有為の唱えた内政・制度改革である「戊戌の変法」の動きは光緒帝の伯母、西太后による政変によって中止させられるが、義和団事変での敗北によって清朝は改革を行う必要に迫られ、再び政治改革（光緒新政）が始まることとなる。

この改革によって西洋式学校が設立され西洋や日本で行われていた近代的教育が規範として取り入れられるようになり、科挙試験の代わりに海外留学が認められるようになる。1905年には、1000年以上続いてきた科挙制度が正式に廃止され、これ以後近代的な教育が本格的に行われるようになる。

清朝末期から中華民国にかけ、海外留学を経験した若者たちは帰国後、それぞれの分野でその手腕を振るうこととなる。この時代、中華民国臨時大總統となった孫文や北京大学学長となった蔡元培、『阿Q正伝』などの著作で知られる魯迅など、当時の中国社会を担う人材の多くが留学

経験者であることから、それまで行われていた科挙試験に代わり、海外留学がエリートになるための手段として社会に定着していったであろうことが理解できる。

清朝末期から取り入れられるようになった近代的教育は、中華民国・中華人民共和国を経て現代の中国社会にも受け継がれている。現在の中国での初等・中等教育は日本と同じ6・3・3制が一般的であり、小学校・初級中学（日本の中学にあたる）・高級中学（日本の高校にあたる）の三つに分かれている。高等教育期間として日本と同様に大学があるが、大学入試の仕組みは中国独自のものであり、この仕組みが受験競争を過熱化させている一因となっている。

中国の大学入学試験は正式には「全国大学統一考試」と呼ばれているが、大学入試を指す時には、以前の名称である「普通苦闈学校招生全国统一考試」の略称である「高考」がよく用いられるため、本稿でも「高考」の名称で記述を行うこととする。

高考は日本のセンター試験同様、全国一斉で行われる試験であるが、この試験の特色は日本での二次試験に該当する試験がなく、この高考の結果のみで合否が決まってしまう点にある。受験生たちはあらかじめ自分の志望する学校をリストにまとめて提出し、高考を受験する。高考受験後、テストの結果が志望校の合格ラインを上回っていれば大学生への道が開けることになるが、高考の点数がリストにある志望校の合格ラインのいずれにも届かなかった場合、大学進学は絶たれることとなる。

また高考の、もう一つの特色として生徒の出身地域によって、志望校の合格ラインや定員が変化することが挙げられる。各大学はまず募集定員の内、大学の所在する地域の出身者に多くの定員を割り当て、残りの定員を他の省・自治区・直轄市の受験生に割り当てている。その為、他地域の大学を受験しようとする受験生は、その地域出身の受験生と比べて、より少ない定員を他の受験者たちと取り合うこととなり、合格ラインも地元の受験生の合格ラインよりも高くなってしまっているのが現状である。受験生が地元を離れて進学しようとする場合、志望する大学の地域に住む受験生以上の学力が必要となってくる。このため、高考の受験前に志望校の所在地に戸籍を移し、受験の際に少しでも有利になろうとする受験生や家族が存在する。

高考は毎年1000万人近くが受験をする世界最大の大学入学試験と言っても過言ではないだろう。そして、ただ一度の試験に自分の将来を賭ける受験生と家族の熱心さは、受験戦争の過熱ぶりで見られる隣国韓国に匹敵するものである。

高考が「現代の科挙」と呼ばれていることから分かるように、科挙と高考には共通する点が多々ある。高考の成績で全国一位を取った生徒は、科挙試験での首席合格者を指す「状元」と呼ばれ、受験の成功者として各メディアから出演依頼が舞い込み、人気タレントのようにもはやされる。「状元」を取ることで家族だけでなく学校や地域の名誉となり、世間からの賞賛を受けるようになる点は科挙の時代も現代も変わらないのである。

科挙の時代、将来の受験生たちが受験勉強を始めたのは3歳～5歳くらいからであった。科挙は「30歳で進士になっても遅いほうではない」と言われていた程、難しい試験であったから当時の受験生たちは20年以上もの間、受験勉強が続くことが当たり前だったのである。現代中国の受験生たちも科挙の時代ほど、とまではいけないが小学校の時から10年近く、高考を意識した勉強を行っている。

隋の時代に生まれた科挙は、身分などではなく実力で人を計る試験として清朝末期まで1000年近く行われ続けた。しかし近代化の波によって科挙は中止となり、中華民国の時代には海外留学という新しいエリートへの道が社会に定着することとなった。そして現代で行われている高考は、全国統一の試験であることや実力で人を計ること、そして首席を「状元」と呼んでいることから考えると、科挙のDNAを受け継いだ試験と言えるだろう。本章は、儒教の誕生から現代までの中国の歴史の中で、時代ごとの異なったエリート輩出の方法を述べてきた。次章では、高考の受験生たちに焦点を当て、彼らがなぜ高学歴を望むのか、そして大学に入った後にどのような職を求めているかなど、受験生のバックグラウンドを探っていきたいと思う。

## 第2章 現代中国教育事情

### 1. 現代中国の初等教育の現状

前章3節では、毎年受験生が増え続けるにつれ過熱化していく高考の様子を記述し、より高いレベルの大学に入学するために様々な手段を尽くす受験生とその家族について述べた。そして本章では、高考に臨む受験生たちがどのような環境下で、勉強しているのかを、小学校と高級中学の観点から書いていきたいと思う。

2007年から2008年に掛けて放送されたNHKのドキュメンタリー番組『激流中国』シリーズの内の一つ、『五年一組 小皇帝の涙』は地方の教育の実情を最も良く学ぶことのできる作品である。この番組は雲南省・昆明にある盤竜小学校の五年一組を舞台に、熾烈な学力競争の渦中にある小学生たちとその親を映している。

この番組に出てくる小学生たちは学校から帰宅してから夜遅くまで勉強を続けている。熱が出て学校を休んだとしても、熱が下がればベッドから出て学校を休んだ分の遅れを取り返そうと勉強をする。子供たちが友達と遊ぶこともなく、家でも学校でも四六時中机に向かって勉強するのは、周囲の大人たちから大きな期待をかけられているからである。五年一組の生徒の一人、銭君は普段は苦手な数学のテストで取った91点という高得点を母親である王さんに自慢するが、テストを確認した母親は点数に満足せず、銭君に宿題をやるように促す。

王さんは、息子に勉強に向かわせる理由についてこのように語っている。

「私たちはリストラを経験しました。だから、この子にはもっと勉強していい大学に入ってほしいんです。」「中国は『一人っ子』です。この子が成功すれば100%成功、失敗すれば100%失敗。成功すれば社会の人材、失敗すれば家庭の負担なんです。」（銭君家族へのインタビューの場面にて）

共に国営企業（中国の国営企業は現在、国有企業化されている）に勤めていたがリストラを経験した銭君の両親は、番組の撮影当時、契約社員やパート従業員といった不安定な雇用状態にあった。そのため息子である銭君には、自分たちのような苦勞を味わうことのない、立派な職業

に就いて欲しいと期待をかけている。こうした、自分たちの子供への期待は銭君の両親だけが持っている特別なものではない。銭君のクラスメート、杜さんの母親、許さんも銭君の両親と同じクリストラの経験がある。そのため娘を医者のように失業することのない職に就かせたいと、娘の教育に熱心である。

銭君や杜さんの家庭のように親たちは自分の子供が良い職業に就けるようにと、子供たちの将来に期待をかけて教育を行っているが、良い職業に就くためには良い成績が必要であると考えている。番組の冒頭、五年一組の生徒たちが自分の将来の夢を発表する場面がある。医師や証券トレーダー、国家主席など子供たちは大きな夢を語るが、成績の良くないある生徒が医者になりたいと話すと五年一組の担任である楊先生は、医者とは人の命を預かる仕事であるから成績の悪い者は医者にはなれない、と強い口調で生徒を叱り、目標のためには毎日勉強をしなければならぬ、と生徒たちにむかって話をする。楊先生の話す成績の悪い者は将来立派な職業に就くことが出来ない、という考えは教師たちだけでなく、保護者たちにも共通したものである。そのため、子供の将来を案じる親たちは、子供が良い成績をとるようにと、教育に熱を上げるのである。

そして、親の教育熱を更に駆り立てる要因となっているのが学力を巡る競争と一人っ子政策である。

日本の小中学校では、全国学力テストの結果の公表を巡って様々な議論がされているが、中国では学区内の学校の順位が公表されており、学校内では生徒たちの順位までもが公表されている。そのため学区内では学校間での順位を巡る競争が激化している。また、教師の評価も受け持っている生徒の成績や進学実績によって決められる。中国の教育現場では、生徒だけでなく教師や学校までもがそれぞれの成績によって判断されているのである。だが、この教育現場での成績一辺倒の姿勢は、子供たちに良くない影響を与えている。五年一組のクラス委員長選挙は生徒だけでなく保護者も参加して行われるが、前述したようにクラスでの生徒たちの順位を皆が知っているため、票が多く集まるのは成績がトップの子供だった。遠足に行くための班分けでは、どの班にも入れてもらえない生徒がいた。ほとんどの生徒が成績で班分けをしていたため、勉強が苦手なこの生徒は仲間外れにされてしまったのだ。

子供たちは親や教師たちの成績を重視するという姿に影響を受け、一生懸命勉強する一方で、上記の事例のように成績で人を判断する傾向が強くなってきており、学業に関係のない遊びの場などでも成績の近い者たちで集まるようになってきている。また、勉強を重視する余り、早く宿題を終わらせるために学校の掃除当番をサボって帰るなど、学業以外の面での問題も起こっている。

二番目に挙げられる要因が中国独特の政策、一人っ子政策である（近年、中国政府は一人っ子政策を緩和しつつある）。人口を抑制するために1979年に始まった一人っ子政策では、少数民族などの例外を除いたほとんどの家庭では原則として子供を一人しかもつことが出来ない。兄弟姉妹がいる家庭であれば親の期待が子供たちの内の一人だけに偏るということは少ない。しかし一人っ子の家庭の子供は、兄弟姉妹がいないために両親の愛情を独り占めできる反面、両親からの期待を一人で担わなければならないのである。また、中国社会は儒教の影響を受けており、親を敬い大切にするという儒教の「孝」という考えから、将来的に子供は親の面倒を見る、という意

識が強い。こうした背景から、将来子供に面倒を見てもらう時に、苦しい生活を送ることがないよう、子供の将来、そして自分たちの将来をより良いものにしようと、親が子供に期待をかけて、熱心に教育を行っていることが理解できる。

この番組を見ると中国の子供たちは日本の子供たちと比べて、非常に早い時期から将来を見据えた勉強を行っていることが分かる。

## 2. 中国受験生事情

2014年6月26日の『朝日新聞』（朝刊）の国際面には「中国「超級」進学校は軍隊式」という記事が掲載された。この記事は、中国有数の公立の進学校である河北省の衡水中学（この学校は日本の中高一貫高に相当する）取材したものである。この衡水中学は、その厳しい管理教育から「軍隊式」とも呼ばれる全寮制の学校であり、中国の難関名門大学へ多数の合格者を輩出することで知られている。同校は2013年の高考で中国トップクラスの大学、北京大学と清華大学（両校は大学評価の世界的指標であるThe Time Higher Educationの世界大学ランキングで北京大学は45位、清華大学は50位である。この順位は52位の日本の京都大学よりも高い<sup>3)</sup>、両大学へ104人の合格者を出し、両大学が河北省に持つ合格者枠の8割を衡水中学が占めた。

北京・清華両大学の合格率で全国最高レベルを収めている衡水中学はその徹底した管理主義で知られている。学生たちの一日は分刻みのスケジュールで管理されており、朝5時30分の起床から夜の22時10分の就寝まで隙間なく予定が詰め込まれている。

名門大学への進学、という明確な目標を掲げる衡水中学であるが、その特色として挙げられるのが、校内での競争を推奨しているという点ではないかと思われる。生徒たちは能力別にクラス分けをされているが、それぞれのクラスは成績をもとに一つ星から五つ星の五段階の評価を受け、各クラスの扉には成績に応じた数の星が張られている。星の数によって各クラスの順位は明確であるが、クラス間での「下剋上」が推奨されていることもあり、各クラスは成績を競い合っている。

こうした成績の競い合いはクラス間だ

衡水中のスケジュール  
管理表の主な項目

5:30	起床
5:45	ランニング
6:00	自習
6:30	3年生が朝食
6:34	2年生が朝食
6:38	1年生が朝食
7:10	自習
7:45	授業
10:05	ランニング
10:30	授業
12:00	昼食
12:40	宿舎で休憩
14:05	授業
18:15	3年生が夕食
18:19	2年生が夕食
18:23	1年生が夕食
18:50	テレビでニュース視聴
19:15	授業
22:00	教室消灯
22:10	就寝

衡水中の校内には、至る所に歴代の成績優秀者の写真が掲げられている



教室の扉に張られた星の数が、そのクラスの優秀さを示している




出所 「中国「超級」進学校は軍隊式」2014年6月26日朝日新聞朝刊より引用

けのものではなく、生徒たちの間でも行われている。学校の壁には成績優秀者の壁写真が飾られているが、そこにはその生徒がライバルと認める他の生徒の名前も一緒に記されている。

大学入試合格に向け只々勉強をするだけでなく、他のクラスやライバルの生徒を意識させ、学校内で競争する環境を作り上げることで、生徒の学力を高めているのではないだろうか。

しかし、激しい受験戦争の中、衡水中学のような学校は数少ない「成功」例である。

下記の表2-1は2008年からの高校の受験志願者数と合格者数をまとめたものである。2010年に入ってから5年間は、毎年受験者数が900万人を超えており、毎年50万人ほどが受験する日本のセンター入試と比べると、その差は18倍近くにも上る。

表2-1

年	受験志願者数	合格者数	合格率
2005	877	504	57.5%
2006	950	546	57.5%
2007	1010	566	56.0%
2008	1050	599	57.0%
2009	1020	629	61.7%
2010	957	657	68.7%
2011	933	675	72.3%
2012	915	685	74.9%
2013	912	未公表	未公表
2014	939	未公表	未公表

出所 日経ビジネスonline『大学入試に替え玉ブローカーが暗躍』より筆者作成<sup>4</sup>

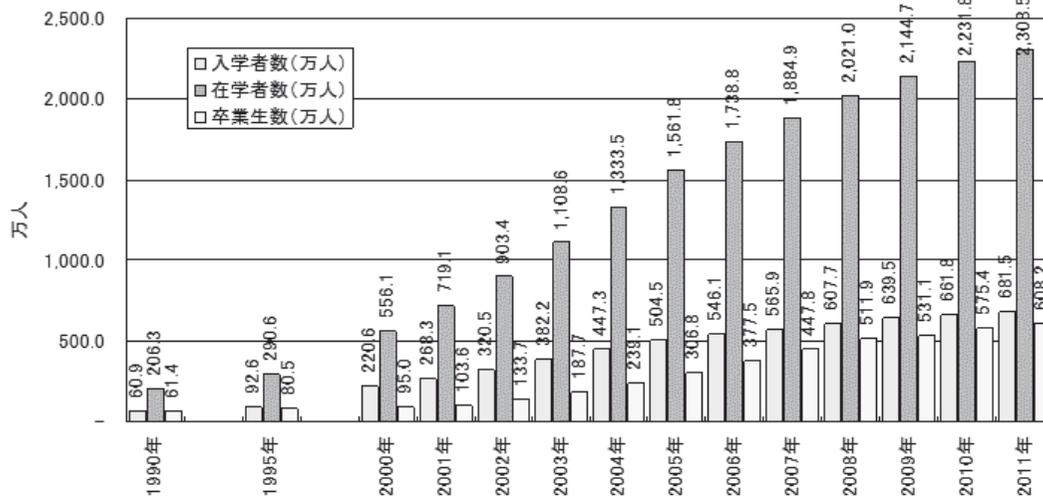
表には記載していないが、1998年の高校受験者数は約300万人であり、受験者数のピーク時である2008年の人数と比べると3分の1ほど、つまり10年という短期間の間に受験者の数は3倍に激増しているのである。2008年までの高校合格率は50%台であったが、高校の受験者増加に伴い、中国国内では大学の定員増や新たな大学の設置などの対策が取られ合格率は上昇傾向にある。

しかし、合格者すなわち大学入学者の増加は、「大学卒業」という学歴の一般化を招くことになる。図2-1を見ると中国の高等教育機関卒業生数は毎年増加傾向にあり、2011年には600万人を超える卒業生が出ている。1990年の卒業生数と比較すると20年間で10倍の学生が社会に出るようになっているのである。

そのため、労働市場には多くの高学歴者が溢れており、労働市場での需要と供給のバランスが取れなくなっている。少ない求人にたいして多くの申し込みが殺到するため、選考では出身大学が重視されるようになっており、大学のレベルが高ければ高いほど、自分の望む仕事に就く可能性が高くなっているのが現状である。

高校に臨む受験生たちはこうした就職活動の現状を知っているため、自分たちが就職活動をする際、同じような苦勞を味わうことの無いよう、よりレベルの高い大学へ入ろうと受験勉強に熱を入れるのである。

図2-1 高等教育機関における入学者・在学者・卒業生の推移 (1990-2011)



出典:「中国統計年鑑2012」

出所 SciencePortal China 「高等教育機関における入学者・在学者・卒業生数の推移 (1990-2011年)」より引用<sup>5)</sup>

### 3. 更なる高学歴の渴望

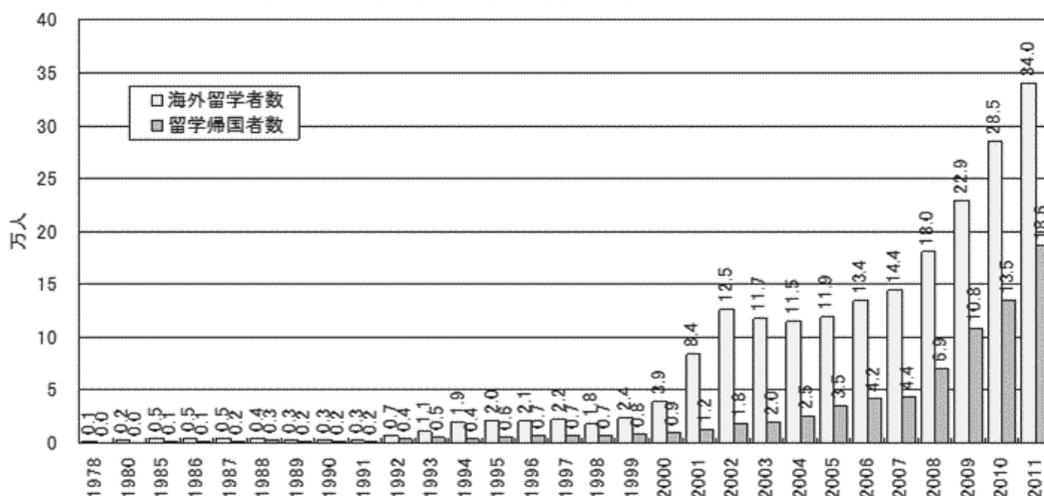
急激な大学入学者の増加により、一昔前であればエリートの代名詞であった「大学卒業」の肩書も今日ではポピュラーなものとなってしまっている。大学卒業見込みや大学既卒で溢れ、就職氷河期を迎えている昨今の中国の労働市場の中では、自分の望む仕事を得るためには、自分が抜きん出て優秀な人物であることを示さなくてはならない。そのため、近年では一般的になってしまった「大卒」以上の学歴を得ようと大学院への進学や海外留学に行く学生が多く存在している。北京大学や清華大学など、国の指定を受ける「重点大学」では大学卒業後の進路を考える時、優秀な順に留学、大学院、就職の進路に進むという暗黙の了解ができていているといわれている。また、留学組の中でも最も優秀な学生たちがアメリカへ、次に優秀な学生たちがヨーロッパへ、最後に残る学生たちが日本などへ留学に行くという暗黙の選別があるという<sup>6)</sup>。

中国国内で大学院に進学するためには、「考研」と呼ばれる試験を受けなくてはならない。昨今の就職氷河期と相まって大学院進学に多くの学生が集まるようになっており、2010年には最多記録となる140万人を超える学生が考研を受験した。

また国内で学ぶ以上の学歴を身に付けようと、海外の大学や大学院への留学も大きな人気を集めている。

前述したように留学組は大学の中でも一握りの優秀な学生たちで構成されている。中国からの留学生は1978年以降、毎年のように増加傾向にあり2011年には34万人もの学生が海外へと旅立っている。アメリカやヨーロッパ、日本などに多くの学生が留学しているが、中でもアメリカへの人気は高く、2001年に6万人を超えて以降、2008年には約10万人、2009年には約13万人、2010年は約16万人と増え続けている。

図2-2 海外留学人数及び留学帰国人数の推移（1978-2011）



出典:「中国統計年鑑2012年度版」

出所 Science Portal China 『海外留学人数及び留学帰国人数の推移（1978-2011年）』より引用<sup>7</sup>

優秀な学生たちが続々と海外へと留学に行く背景には、中国社会を牽引する多くの留学経験者たちの存在がある。

成長を続けている中国経済のなかで、頭角を現れてきているのがIT産業である。ネット通販大手のアリババや交流サイト（SNS）を運営するテンセント、中国最大の検索サイトの百度など、中国のIT業界では近年急成長を遂げる企業が多く誕生している。こうした成長著しいIT業界では、百度の李彦宏、ポータルサイト「搜狐」の張朝陽などに代表される留学経験を持つ実業家たちが数多く活躍している。

留学経験者たちの活躍は産業界だけに留まっではない。中国の大学長の78%、中国科学院と中国工程院のアカデミー会員の80%に留学経験であるといわれている<sup>8</sup>。

このように、留学先で学位を取得し帰国したエリートたちは、外海で育ち浜に戻ってくるウミガメになぞらえて「海亀族」と呼ばれている。

中国国内のさまざまな分野で活躍する海亀族に続こうと、年々多くの学生たちが海外を目指して中国を旅立っていくのである。

## 第3章 明暗の分かれる進路

### 1. 大学生の就職活動の現状

前章では大学受験に向けて勉強をする小学生や高級中学生（高校生）の姿や、更なる学歴を得ようと大学院や海外留学へ進む大学生たちについて記述をしてきた。人より抜きん出た高学歴を得ようと努力をする彼らだが、彼らの最終目標は自分たちの持つ高学歴に見合った職業に就くことである。

学校の1年が4月に始まる日本とは違い、9月に新学年が始まる中国において、大学生たちの就職活動は2月にスタートする。これは大学生の就職活動が3月から始まる日本とは、始まる時期に違いはあるが、日中両国の就職活動の中身にはそれほど大きな差はない。職を得ようとする大学生たちはまず、就職展示会（日本では就職説明会）へ行きその後会社訪問を行う。入社試験を受けてみようと思う企業があれば、履歴書などの応募書類を提出し、筆記試験や面接試験を受け、試験に合格すれば企業から内定をもらう。

日本の就職活動では学生の大手企業志向が報じられることもあるが、日本の大学生と同じく中国の学生も大手企業に就職することを目標に就職活動を行っている。表3-1は2008年の中国での大学生の人気企業ランキングトップ20社をまとめたものである。このランキングを見ると通信やIT、金融や石油といった業界に人気が集まっている。こうした業界に学生の人気が集まるのには、格差社会が広がっている中国社会ならではの理由が存在する。中国国家统计局によると、2010年の都市住民の可処分所得は一人当たり19109元であり、農民一人当たりの5919元のおよそ3倍になる。こうした格差は業界間にも存在しており、電力・通信・石油・金融などの国営・独占企業の平均給与は他業界の2～3倍になる。更に国営企業などの管理職クラスになると、その所得は社会一般の平均所得の128倍にもなると言われている<sup>9</sup>。平均以上の給与を得ることのできる、いわゆる「勝ち組」と言われる仕事が、社会的成功を求める学生たちの人気を集めている。

就職活動を行う学生たちから、大手企業と同様の人気を集めているのが公務員である。改革開放後、貿易業やIT業などの中国経済を牽引する新しい職業に人が集まる一方、改革開放以前から存在する公務員の人気は低かった。しかし2000年代半ばから大学生の就職難が深刻化してく

表3-1

順位	企業名	業種
1	中国移动通信集团	通信
2	華為技術	通信
3	P & G	日用品
4	レノボ集団	PC
5	ハイアール集団	家電
6	I B M中国	PC
7	マイクロソフト(中国)	IT
8	中国広東核電集団	電力
9	中国銀行	金融
10	G o o g l e 中国	IT
11	アリババネットワーク技術	IT
12	百度	IT
13	中国電信集団	通信
14	騰訊科技	IT
15	S i n o p e c	石油
16	万科企業	不動産
17	招商銀行	金融
18	ペトロチャイナ	石油
19	中興通迅	通信
20	シーメンス(中国)	通信

出所 園田茂人・新保敦子『教育は不平等を克服できるか』p112より引用

ると公務員人気が高まり、公務員試験に多くの受験者が集まるようになっていく<sup>10</sup>。

日本でも公務員人気は高く、毎年多くの人が試験を受験しているが、日本と中国で公務員に人気が集まる理由に大きな違いはないと言える。公務員は一般企業と比べて賃金は低いが、リストラや倒産の心配のない安定性、社会的評価の高さや仕事の堅実性、福利厚生充実など数多くの魅力があり、これらの魅力が多くの人を引き付けている。

本節冒頭では、大学生たちは自分たちの学歴に見合った職を得ようとしていると述べた。大手企業や公務員といった仕事に大学生たちの人気が集まっていることから、安定的な雇用形態、大手・有名企業といった肩書、平均以上の給与などが高学歴への対価として釣り合うと、大学生たちが考えていることが分かる。

大学生たちは高学歴保持者として、仕事に多くの対価を望んでいる。しかし前章でも既述したように労働市場には毎年多くの大卒者が流れ込んでおり、その数は年々増加傾向にある。大卒者は急速に増えているが、高学歴が求められるポストの数は大卒者の急増に追いついていないのが現状であり、中国の労働市場では需要と供給のバランスが崩れ、大卒者の供給過多になっている。

こうした状況下では、高学歴に見合う理想的な求人募集があったとしてもそこには応募が殺到し、競争倍率は非常に高くなり仕事に就く望みは薄くなってしまふ。そのため、なんとしても就職したいと考える学生は高待遇の仕事を諦め、仕事に対する望みのハードルを数段落とす必要に迫られる。ハードルを落としてもなお、大卒者で溢れている労働市場では職を得ることが厳しい状況である。

## 2. 就職事情の厳しさによる「蟻族」の誕生

職に就き、正社員並みに働きながらも低賃金のためにギリギリの生活を余儀なくされる「働く貧困層」であるワーキングプアは、先進国を中心に大きな問題となっている。日本でも派遣社員やパート労働者など非正規雇用者の増加に伴い、ワーキングプアの問題は深刻化の一途を辿っている。中国では毎年600万人近い人数が大学を卒業するが、就職率が60%から70%台で推移していることから<sup>11</sup>、毎年100万人以上が就職できていないことになる。正規の職に就くことが出来なかった大卒者たちは食い繋いでいくためにも、賃金の安い非正規の職に就いて働くことを余儀なくされ、家賃や物価の安い都市近郊の農村で暮らしている。家賃の安い地域にひしめき合っ  
て暮らす彼らは、知能が高く群れて暮らす蟻に例えて「蟻族」と呼ばれている。

蟻族研究の第一人者である廉思は蟻族の特徴として「大学卒」「低所得」「一か所に集まって暮らしている」の3点を挙げている<sup>12</sup>。蟻族の若者たちの多くは農村や地方都市出身であり北京や上海など、大都市にある大学を卒業している。廉思の調査によると蟻族の両親の多くは社会の中、下層の出身であり、その家庭の収入は低い<sup>13</sup>。貧しい環境下で育った蟻族は、こうした環境を抜けて高学歴によってより良い人生を切り開くよう、家族の期待を受けて勉強に励んできた。彼らは高級中学卒業時には、大学卒業後の華々しい将来を夢見て大都市にある大学へと進学してくる。彼らの思い描く成功とは、大都市や世界を舞台に活躍するビジネスマンや企業家の姿であり、故郷やその他の地方で働こうという考えはほとんどない。

大学生数が増え続け、それに伴い多くの大学が新設されている中国では、進学先を選び好みしなければ誰でも大学に入学できる時代へと到達しつつある。金銭的に余裕のない家庭で育った蟻族たちは自助努力によって大学進学を果たしているわけであるが、彼らの卒業先を見ると、「国家重点大学<sup>14</sup>」や「211工程<sup>15</sup>」の指定大学を出た蟻族は全体の10%前後であり<sup>16</sup>、全体の90%近くの蟻族は国からの指定や支援を受けていない一般的な大学に通っている。

大学入学後も、良い職に就くことを目指して勉強続けてきた蟻族であるが、就職活動を始める頃、彼らを待っていたのは前述したような厳しい就職事情であった。大学全入学時代が到来してから久しい日本の労働市場では、大手企業の求人により多くの新卒学生が殺到するため、学生の出身大学によって線引きが行われることがある。このため、学生の出身大学によっては求人の応募の時点で足切りされてしまうという学歴差別が起こることがある<sup>17</sup>。こうした出身大学による差別は、筆者が知る限り中国では確認されていない。しかし中国も日本と同様に、毎年多くの新卒学生が労働市場に流れ込んでいる。企業の求人にも何千、時には何万もの応募が集まる現状では、出身大学のレベルを選考の判断材料の一つとすることは大いにあり得ることであり、有名大学卒というような肩書を持たない蟻族たちが就職活動で苦戦していることにも納得がいく。

就職活動の結果、蟻族たちの多くはホワイトカラーの仕事に就くことができたが、その仕事の中身は彼らが大学進学当時夢見ていたビジネスマンの姿とは程遠いものである。中国国家统计局の発表によると、大学生たちのあこがれの仕事である金融業やIT業などの平均年収は9万元台、一般企業で働く都市住民の年収は3万3000元程であり<sup>18</sup>、蟻族の月収がおよそ2000元程<sup>19</sup>であるのと比べると、蟻族の夢と現実の間には非常に大きな隔たりがあることが分かる。

都市周辺の農村で家賃を抑えるためのルームシェア暮らし、不安定な雇用形態や低賃金といった多くの問題を抱えながらも、蟻族たちは故郷に帰るという選択を取ることはない。蟻族の都会志向の状況を廉思は「外地の一軒家よりも、北京のベッド一つのほうがいい<sup>20</sup>」と表現している。実際、中国の西部は長らく発展から取り残され、開発途上地域となっていたが2000年から大規模な開発計画「西部大開発<sup>21</sup>」が開始されており、西部地域は急速な発展を遂げつつある。こうした地域は成長を支えるために多くの人出や人材を必要としているが、こうした地域の求人に蟻族が応じる動きはない。地方から都会へと上京してきた蟻族にとっては、都市で良い仕事に就くことが成功なのであり、まがりなりにも大学を卒業したというプライドを持つ彼らにとって、いくら景気が良いからといっても地方で働くことは、言わば都落ちとも取れる行動なのである。

社会的成功を目指し蟻族にとって高学歴とは自己実現を行うために必要なスキル、都市とは自己実現を行うためのステージなのである。大学卒業によって必要なスキルを手に入れ、成功を掴むためにステージに立ち続けている彼らにとって、都市を離れるのは夢破れた時である。困窮した生活を送っている蟻族ではあるが、彼らが都市を離れようとならないのは、如何なる境遇にあらうと蟻族の若者たちが将来の希望を諦めていない証拠なのである。

### 3. 中国社会の既得権益者たち

前節では、大卒という高学歴を持ちながらも貧困の状態に陥っている蟻族の状況について記述

してきた。彼らは社会的成功を夢見て地方から都市へと上京してきた訳であるが、蟻族の置かれている現状は、彼らが望む成功とは程遠い状況にある。

蟻族たちはなぜ彼らが希望するような良い職に就くことができないのか。前節ではその一因として彼らの出身大学について指摘をした。一般的な大学を出た彼らが就職活動において、有名大学卒という肩書を持つ学生たちと同じポストを競った場合、蟻族の出身大学が有利に働くことはない。

しかし、肩書以外にも蟻族が持たず、そして就職活動において重要なものが一つある。それがコネだ。地方の貧しい家庭の出である蟻族や蟻族の両親には、都市の大企業へのコネなど当然持ってはいない。元々、改革開放までの中国では就職活動というものはほとんど行われておらず、農民の子は親の仕事を継ぎ、都市の住民は親戚や知人のコネもしくは、国の斡旋によって就職することが一般的であった。

改革開放から20年近くたった現在では、子が親の仕事を継ぐ必要もなくなり、国による仕事の斡旋もなくなった。大学生の数も増え続け、就職活動が盛んに行われるようになった中国社会であるが、依然として強い影響があるのがコネによる就職である。

中でも、最も強いコネである親のコネを最大限に利用する子供たち、日本語で二代目を意味する「二代」と呼ばれる若者たちが近年の中国で幅を利かせている。国有企業や大手民間企業経営者の子である「富二代」や政府の高級官僚を両親に持つ「官二代」、中国共産党幹部の子どもである「太子党」は、今後の人生を懸けて大学受験・就職活動に挑む一般の学生たちを尻目に、親の権勢を最大限利用して学校への裏入学やコネ就職を行う。そして苦勞することなく職を得た「二代」たちには明るい将来も約束されている。企業や行政に入った者はトントン拍子での出世が、経営者の親を持つ者には企業トップの椅子が待っている。

彼らの隆盛を支えている重要な要素が汚職などの不法行為である。開発事業での土地収用<sup>22</sup>に関して便宜を図る見返りに賄賂を受け取るなど、大きな権限を持つ中国の官僚は自身の関係する利権を駆使して非常に大きな額の賄賂を得ることができる。近年、中国では汚職追放の流れを受け多くの官僚や共産党幹部が逮捕されているが、日本円にして数十億・数百億にも上る押収額を見ると、如何に多くの富が社会の上層へ流れ込んでいるか、その片鱗を窺い知ることができる。

## 第4章 学歴信仰の全体像

本卒業論文は中国において高学歴が重要視されている背景を解き明かすことを目標に掲げている。中国における学問の歴史的背景や現在の学生たちの現状を、大学卒業後の進路状況などに注目して研究を進めてきた。これまでの研究からは、中国で高学歴が重視される大きな理由として清朝末期まで行われていた官僚登用試験である科挙の存在、そして現代の中国が抱えている格差の問題が大きく関わっていることが分かった。

漢王朝の終焉後400年ぶりに中国を統一した隋で、実力ある者を官吏として登用するために始まった科挙は、限られた身分の者だけが政治に加わることでできたそれまでの中国の王朝や当時の世界の国々の国制とは一線を画すものであった。貴族以外の身分に政治参加への門戸を開いて

いた科挙は、非常に先進的な試験制度であったと言える。科挙以前、コネや世襲などによって得ていた官吏の職は、科挙が始まったことによって完全に実力本位のものとなった。ほぼ全ての身分に開かれた試験である科挙は、階級が固定化されている封建社会においては唯一とも言える階級上昇の手段であり、中国社会で非常に人気を集めることとなった。

一見平等な試験制度である科挙ではあるが、合格には30年以上の歳月が掛かることが一般的であり、家計へ大きな負担が掛かることから、庶民が気安く受けられるようなものではなく、実際に科挙を受けた者の多くは比較的裕福な家の出であった。

しかし、実力主義を謳う科挙制度が隋の時代から清朝末期までのおよそ1300年間続いたことから見ても、科挙制度が中国社会で広く支持されていたことが理解できる。前述したように家計の面から見て庶民が科挙を受けることは難しいことであったが、時には庶民の身分から科挙を通じて階級上昇を果たし、宰相などの地位を得た者も出ていたことは、既に1章でも述べた。

清朝末期の中国社会は幕末の日本と同様に近代化の必要に迫られ、1905年近代教育の導入と同時に科挙制度は廃止された。しかし科挙制度が廃止されてから100年あまりの歳月がたったが、科挙を通じての立身出世というストーリーは、今日中国社会においてもなお非常に大きな影響を与え続けている。大学入試試験、通称「高考」に挑む受験生たちの胸裏にある高学歴を得て良い仕事に就きたいという思いは、官職を得て立身出世を果たすために科挙を受けた者たちと非常に似通っている。高考を取り巻く状況について、2章で言及している通り、高考では有名大学に人気が集まっており合格倍率も他と比べて非常に高くなってきている。中国で1、2を争う一流大学である北京大学の全受験者に占める合格者の割合は、3000人に1人と言われる科挙試の倍率に相当する<sup>23</sup>との指摘があるなど、高考の過熱ぶりは科挙の時のそれと非常に重なるところがある。

科挙の行われていた時代と比べると、現代におけるいわゆる「勝ち組」の仕事は官職だけに留まっていないという違いがある。しかし、それでも学力・学歴が重視されている背景には、現代社会に色濃く根付いている「学問によって身を立てる」という科挙の伝統が存在しているからだと思えることもできる。

高学歴重視のもう一つの原因として挙げられるのが、格差の問題だ。改革開放以降、急速な経済発展を遂げた中国は今やGDP比で日本を抜き、世界第二位の経済大国となった。しかし経済発展の陰で所得の格差が生じるようになり、今日中国社会では貧富の差が深刻化してきている。

3章3節では、大学生の就職活動時にコネが重要となっていることについて言及をしたが、コネの有無しが問われるのは就職活動だけではない。企業や行政にコネの力によって就職した者には望む仕事、望むポストが用意されており、彼らの出世のスピードはコネを持たない同期たちとは比べ物にならないほど早い。仕事において重要なポストの多くはコネを持つ人々によって占められており、コネも持たない者が上を目指してどんなに頑張ったとしても、彼らを待ち受けているのはコネという名のガラスの天井である。また、中国社会では汚職の蔓延も深刻化している。大きな権限を持つ官僚を中心に広がるコネと汚職の関係は官と民の癒着を深め、中国の既得権益層の富を増やし続けている。

国民すべてが貧しかった毛沢東の時代とは違い、経済発展は中国国民の間に階層を生み出し

た。社会の上層に位置する既得権益者たちが非常な富と権力を享受し、我が世の春を謳歌しつつある一方で、階層の固定化が進んでいることで貧困状態から抜け出せなくなっている者たちが存在している。前述したように、社会の中での金、ポスト、権限のほとんどが上層に握られている現状では、下層の人々が階級上昇を果たすための手段は限られている。そのため階層による差別が少なく、努力を続ければ報われる（と思われている）勉強、そして勉強の先にある学歴に人々の人気が集まっていると言える。

しかし一口に階級上昇と言っても封建制の時代とは違い、身分制度が廃止されている現代の中国で階級の差を見極めることは難しく、階級上昇を望む人たちが具体的に何をもって階級上昇を果たしたと見なしているのかということは、当事者外の立場からは理解し辛いことである。中国社会が期待する、いわば学問を修めた先にある成果とはなんであるか、それを窺い知ることができるのが宋の真宗皇帝の書いた『観学詩』である。

家を富ますに良田を買うに用いず	(金持ちになるに良田を買う必要はない)
書中自ら千鐘の粟有り	(本のなかから自然に千石の米がでてくる)
安房するに高粱を用いず	(安楽な住居に高堂をたてる必要はない)
書中自ら黄金屋有り	(本のなかから自然に黄金の家がとび出す)
妻を娶るに良謀なきを恨むなかれ	(妻を娶るに良縁がないと嘆くな)
書中女有り顔玉のごとし	(本のなかから玉のような美人が出てくるぞ)
門を出るに人の従うことなきを恨むなかれ	(外出するのにお供がないと嘆くな)
書中車馬多きこと簇がるごとし	(本のなかから車馬がぞくぞく出てくるぞ)
男児平成の志を遂げんと欲せば	(男児たるものひとかどの人物になりたくば)
六経を勤めて窓前に読め	(経書を辛苦して窓口に向かって読め) <sup>24</sup>

『観学詩』では本の中から家や妻が出てくる、という表現を使いながら、学問を修めることで得られる様々なものを列挙している。この詩を現代風に解釈したならば、金、家、伴侶、車などが高学歴によって階級上昇を果たすことで手に入れられるものであり、これらを手に入れることが社会的成功者の証と見られているのではないだろうか。

階級上昇の手段として、科挙が人気を集めていた時代から千数百年経ち、封建制から社会主義体制へ、そして市場主義経済となった現代でも大学進学が階級上昇の手段として人気を集めていることは大変興味深いことである。科挙が始まってから1400年以上たった今日においてもなお、立身出世の手段として「勉強」が重視されているのには、現代においてもなお中国社会に多大な影響を及ぼしている儒教が関係しているとみることもできる。

儒教が漢の時代に国教に認定されて以降、中国社会に広く儒教が浸透していき、人々の多くが儒教的価値観で物考えるようになっていった。既に1章でも記述したように、科挙の試験内容は儒教を中心にしたものであり、科挙を受けることは儒教を学ぶことでもあった。科挙の受験勉強とは、儒教の経典を一字一句違えることなく丸暗記するものだったと言われており、受験生たちは科挙を通して儒教的教養を持つ知識人になっていった。

「万般皆下品 唯有讀書高」(世の中すべてが取るに足らず、学問のみが尊い)という孔子の言葉から窺い知れるように、儒教の教えは学びを重視していた。そして「讀書做官」(学問をして官吏となる)、「学而優則仕」(学問が優秀な者は官吏として使える)という言葉から分かるように、身に着けた学問の使い道として国に仕えて働くことを求めている。勉強することによって階級上昇を行うという考え方は、科挙の時代から現代まで中国社会で広く信じられているが、その考えは上記の言葉から分かるように儒教の思想からの影響を大きく受けている。

現在の中国社会で起こっている高学歴重視の現象は、社会的成功を掴む手段であった科挙の歴史と社会に広く浸透している儒教の思想を根底に、格差に苦しむ人々が抱くより良い生活への渴望が引き金となって起こっている。今日受験戦争の過熱ぶりは、社会的制約と既得権益者が多い今の中国で、最早高学歴にしか階級上昇の望みの綱を託すことができない人々が増加していることの裏返しであると言える。今後、中国社会の学歴信仰と高学歴を巡る競争がどのような変化を辿っていくのか、その鍵を握るのは中国国内に広がり続けている格差に対する政府の問題意識に掛かっている。

## 終わりに

卒業論文では中国社会に高まっている高学歴志向の現象を調べ、学歴信仰が何故信じられているのか、ということを知りたくて研究を進めてきた。これまで論じてきたように、学歴信仰が信じられている土壌には歴史的、文化的な背景が関わっており、また現代社会が抱える格差や就職難などの問題が影響を及ぼしていることが分かった。

詳述すると本論によって、中国の人々が考えている高学歴の価値の一端を明らかにすることができたと認識している。だが高学歴についての意識を明らかにしたことで新たな問題が浮上してきた。中国社会で高学歴を得ることが階級上昇に結びつくと信じられていることについては文中で言及したが、果たして高学歴が階級上昇の手段として有効なのか、意識の上だけでなく実際の中国社会において高学歴が信じられているとおりの効果を及ぼしているのかどうか、などを検証していく必要があるだろう。

今後この研究をより完全なものとしていくためには、高学歴に対する意識に関する問題を解き明かすだけでなく、大卒者の進路や経済状況など中国社会における実態の調査・研究を進めていく必要があると考えている。本卒業論文脱稿の後も、このテーマへの興味と中国社会への注視を続け、研究を深めていきたいと思う。

---

1 諸子百家のうちの一つで、儒教の徳治主義とは対照的に法治主義を唱えていた。

2 儒教の経典である『詩経』、『礼経』、『書経』、『易経』、『春秋経』の五つを指して五経と呼ぶ。

3 Times Higher Education“World University Rankings 2013-2014” <http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2013-14/world-ranking> (最終閲覧日2014年9月25日)

4 日経ビジネスonline「大学入試に替え玉ブローカーが暗躍」

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/world/20140701/267848/?rt=ocnt> (最終閲覧日2014年9月25日)

- 5 Science Portal China 『高等教育機関における入学者・在学者・卒業生数の推移（1990－2011年）』 <http://www.spc.jst.go.jp/education/basicdata/05/03.html>（最終閲覧日2014年9月25日）
- 6 天野一哉 『中国はなぜ「学力世界一」になれたのか』 2013年 中公新書ラクレ p135
- 7 Science Portal China 「海外留学生数及び留学帰国者数の推移（1978－2011年）」 <http://www.spc.jst.go.jp/education/basicdata/07/01.html> より引用（最終閲覧日2014年9月25日）
- 8 南亮進・牧野文夫・羅歆鎮 『中国の教育と経済発展』 2008年 東洋経済新報社 p220
- 9 梁過 『現代中国『解体』新書』 2011年 岩波新書 p144
- 10 同上 p81
- 11 天野 前掲書 p150
- 12 廉 前掲書 p10
- 13 同上 p20
- 14 中国国内の大学のうち、権威ある大学として国家から指定され、予算配分などで支援を受けている大学。
- 15 国家重点大学に代わり、1995年から始まった新たな国家指定大学支援制度の名称。
- 16 同上 p53
- 17 朝日新聞 2014年3月30日付 朝刊1面
- 18 人民網日本語版「都市部の平均年収が増加 最高は金融業」  
<http://j.people.com.cn/n/2014/0528/c94476-8733918.html>（最終閲覧日2014年10月21日）
- 19 梁 前掲書 p120
- 20 廉 前掲書 p34
- 21 沿海地方との経済格差を縮小するために行われている、中国内陸部の経済発展を目的とした開発計画。
- 22 共産主義国家である中国では国内の土地は公有の物であり、人々は土地の使用権を得て住んでいるにすぎない。そのため土地の権利に関しては人民よりも国家の都合の方が優先される。
- 23 園田茂人 新保秋子 『叢書中国的問題群8 教育は不平等を克服できるか』 2010年 岩波書店 p7
- 24 顧明遠（大塚豊 訳） 『中国教育の文化的基盤』 2009年 東信堂 p129

---

#### 参考文献

- 『蟻族』 廉思（関根謙 訳） 2010年 勉誠出版  
『科学』 宮崎市定 1963年 中公新書  
『科学と近世中国社会』 何炳棣 1993年 平凡社  
『科学の話』 村上哲見 2000年 講談社学術文庫  
『新・図説 中国近現代史』 田中仁 菊池一隆 加藤弘之 日野みどり 岡本隆司 2012年 法律文化社  
『儒教（シリーズ 世界の宗教）』 トーマス&ドロシー・フープラ（鈴木博 訳） 1994年 青土社  
『儒教三千年』 陳舜臣 1992年 朝日新聞社  
『叢書中国的問題群8 教育は不平等を克服できるか』 園田茂人 新保敦子 2010年 岩波書店  
『中国教育の文化的基盤』 顧明遠（大塚豊 訳） 2009年 東信堂  
『中国思想史（上）』 日原利国 1987年 ぺりかん社  
『中国の教育と経済発展』 南亮進 牧野文夫 羅歆鎮 2008年 東洋経済新報社  
『入門 中国思想史』 井ノ口哲也 2012年 勁草社  
『はじめて出会う中国』 園田茂人 2013年 有斐閣  
『貧者を喰らう国』 阿古智子 2009年 新潮社

---

#### 参考映像

- 『激流中国 五年一組 小皇帝の涙』 2008年放送 NHKスペシャル

（卒業論文指導教員 何 為民）